

Title	カフカの作品における自伝的要素：『変身』、『巢』をめぐって
Sub Title	Autobiographical elements in Kafka's works : in the case of „Die Verwandlung " and „Der Bau"
Author	黒岩, 純一 (Kuroiwa, Junichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1980
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.41, (1980. 12) ,p.147(46)- 166(27)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00410001-0166

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カフカの作品における自伝的要素

——『変身』、『巢』をめぐって

黒 岩 純 一

I 両 親

カフカの文学はこれまで現代文学論ないしは現代思想論として取り上げられることが多かった。殊にカフカの場合、英、米、仏で注目されドイツ本国へは逆輸入されたという事情がある。もともとドイツ文学という狭い枠をはみ出した普遍的な意味の中で論究せられたうえに、50年代から60年代にかけてドイツでは文学作品を一個の自伝的対象物とみなす内在解釈が主流であり、伝記的あるいは歴史的研究はその後を追いかける形で進められてきた。確かにヴァーゲンバッハによる伝記（1958）は、優れたカフカ研究であるエムリッヒ（1961）、ポリツァー（1962）、ゾーケル（1964）等の著書に先んじて刊行されていたが、それは書名にもあるように、若い時代のカフカ、作家として漸く歩きはじめたカフカを述べたところで終わっている。従ってカフカの生活環境を識るための資料としては、カフカ自身による『父への手紙』（1953）、『日記』（1954）、『ミレーナへの手紙』（1952）と『書簡集』（1958）があるに過ぎなかった。カフカの2度の婚約の相手フェリーツェに宛てた手紙（1967）やカフカの末の妹オットラに宛てた手紙は出版されて（1967）まだ日も浅い。その他、カフカがオットラの夫があるヨーゼフ・ダヴィットに宛てた手紙や、オットラがダヴィットに宛てて書いた手紙がある。いずれもチェコ語で書かれているが、これもカフカ研究の資料としてこれまで十分に活用されたとは言い難い。このようにカフカの周辺、殊に家族関係などを明らかにする資料すらまだ利用されないまま埋もれていたことはカフカ研究における特殊性でもあり、弱点でもあっ

た。これまでも例えばカフカの作品発表の年月をめぐるいくつかの誤りが発見されている。(これについては拙論をご参照いただきたい。)⁽¹⁾

今後なお果されねばならない仕事が多々残されているが、以下、現存する資料を利用しながら自伝的断片の中にカフカの中心的問題を追求してみたい。

『変身』、『巢』を中心に考察するにあたって、カフカの家族関係、とりわけ末の妹オットラにたいするカフカの問題を問題にする。カフカは日記の中で『死刑判決』を例にひいてその背後にカフカ自身がいることを作品の主人公の名前とカフカとを比較しながら暗示している。⁽²⁾ここではしかし更に一步進めて作品と体験の関係を追求し、カフカの作品が単なる模倣ではなく、その時どきにおけるカフカの生活の正確な表現であることを明らかにしたい。テキストの背景となっている著者の生活上の正確な知識は作品の美的な独立性を問題にする際にも必要であろう。

1919年末に書かれたカフカの『父への手紙』には父ヘルマン・カフカと子供たちの関係が詳しく記されている。カフカは子供たちにたいする父親の態度の中にその後の自分自身の成長を決定づけた要因をみている。この父は独善家、皮肉屋であり、子供の個性を踏みじめる脅しを度々使った。これがために子供たちは決断の力を奪われてしまい、それは罪の意識、不安、自信喪失の原因となる。そしてついには自己処刑の心にまで進行する。カフカは家族の中にあっても、他人の中にあっても正常な人間的結びつきを断念せざるを得ない。母ユーリエも父と息子の間にあってもこの関係を緩和することができない。いやむしろ強めている。夫にたいする愛情から子供たちにたいする夫の判断をそのまま引き継いでおり、そのうえ家長制の強いユダヤ人家庭という事情もあり、カフカの母が精神的に独立した力を発揮することはなかったようである。しかし他方、彼女の子供たちにたいする愛情や、人間としての善良さは子供たちによく理解されており、父親にたいするカフカの反抗と憎しみを和らげていた。⁽³⁾子供にたいする母ユーリエの態度は溺愛にちかいと云えるかも知れぬ。成人した子供たちがしばらく家を留守にただけでその心配は大きかった。末娘オットラはヨ

ーゼフ・ダヴィットとの結婚に際して父の猛烈な反対にあったが、母はひそかに許していたらしい。オットラはそれを恋人に手紙で伝えているが、⁽⁴⁾こうした例からも察せられるようにユーリエは母として妻として夫の意志を反映しながらもできる限り父と子供たちの仲介者の立場をとろうとしていた。

こうした家族関係の中でカフカは父や母に依存しない独立した生活、あらゆる方向への自由を求める。その独立性を確保する具体的方策として結婚や家族の生活するプラハを去ることなどが考えられた。「書く」ことも彼の独立性を保障してくれた。しかし実際には独身者として両親の家にいたから絶えず緊張のうちにみずからの生活条件をつくり出さなければならなかった。1914年まで彼は両親の居間と寝室の間の廊下に住んでいた。食事も両親と一緒にあった。ひと時、カフカが家庭内で極端に甘やかされていたという事実もある。殊に彼の病気は母に息子の世話をする機会を与えた。例えば1918年10月14日、彼は当時流行したスペイン風邪にかかり41度近い熱に苦しんだ。両親の寝室は彼のために解放された。病気は4週間つづいた。11月23～24日にかけて再び発熱。そのため11月30日には静養のためシェレーゼンに赴くが、一緒についてきたのは母親であった。この時、カフカは35才である。一方で独立を願いながら実際にはこうした家族関係の中に浸っていた。極端に厳しい父親と子供に甘い母親による家庭生活はカフカ家の場合、息子を価値のない因襲の中へ押し込めた。彼の個人的な生活形成の芽は窒息させられる。これは学問選択についても当てはまる。文学を志望した息子は父の意志で法律への道を歩む。こうした家庭生活の結果、カフカは自分でつくった人間関係以外には価値を見出せなくなる。仕事の場である災害保険局での人間関係は別として、彼の控え目な生活態度から人間的な付き合いは家族中心に行われることになる。この孤立状態はものを書く際に必要な「静けさ」の要求とはっきり区別されねばならない。しかしこのような息子の生活を心配した母は市民的な規範についての影響力を息子には内緒で婚約の相手フェリーツェに求めたほどである。⁽⁵⁾この家庭生活から生れてくるものは当然のことながらアムビヴェレントな感

情であって、家族を傷つけながら同時にこれを弁護する態度であった。カフカはその愛情を理解しながらも常に両親を「追跡者」と感じた⁽⁶⁾。幼年時代から父のもとで精神的な苦痛を味わったが、ものをみる視点はその時からすでに芽生えていたと考えるのは正しくない。1911年秋までは不安も心配も悲しみも抑えられていて両親はまだ視野の中に入っていない。無関心で済ますことができた。1910年まで両親と争ったことはなかったとカフカは強調している⁽⁷⁾。だが1911年末、父との闘争がはじまる。はじめて憎しみを告白する。心境の変化は無論イーディッシュ語劇団に原因するが、父の経営する石綿工場との関係も見逃せない⁽⁸⁾。1911年秋から冬にかけてカフカはほぼ20回もこの劇団を訪れる。Judentumの世界を発見したのである。これが契機となって宗教に無関心であった受け身の「子供」は社会批判を行なう思想家に変身する。勿論、家族との関係も新たな視点から検討される。この時点まで反シオニストであり、同化主義者であったカフカはユダヤ人の母、ユダヤ人の父の機能について考える。アムビヴァレントな意識に基づく家族関係は1911年以降固定化されてゆくが、まさにこの頃から妹オットラにたいするカフカの関係が親密の度を加えてゆく。家族からの逃走、プラハからの脱出、あるいは結婚など永年の夢を実現しようとする幾多の試み。こうした繰返しの中でオットラと過ごす時間だけはカフカに安らぎと平和をもたらした。晩年ドーラ・ディァマンと⁽⁹⁾過ごしたベルリン時代よりも妹と過ごした時代の方が落ち着いた幸福な時代であった。

II 『変身』(1912年11月作)

カフカの作品がその時々々の生活状況の正確な表現であることはすでに述べたが、カフカの家族との関係を証言する作品として戦前のものでは『変身』を挙げることができよう。1912年11月17日カフカはフェリーツェに宛てて書く。(フェリーツェから)「手紙がこないうちはベッドから出ないと決心しました……実はわびしさのあまり起きあがれないのです……」人生に⁽¹⁰⁾錨を下ろそうという意図のもとにフェリーツェとの文通がはじまったの

であるが、いつか彼女が自分に背を向ける日がくると信じてザムザのように朝のベッドから抜け出すことができなかつたのである。ザムザは帽子屋のレジ係の女店員に真剣に求婚したがあまり時間をかけすぎて失敗した⁽¹¹⁾、と書かれているが、フェリーツェは目立つ帽子をかぶっていた。会社での仕事は文書係であった⁽¹²⁾。また1911年11月21日の日記には「長椅子に横たわり、足げにされて世間から投げ出されている」と書かれた個所がある。他人との接触の不調、現実生活における父子闘争、排斥や孤独は『変身』のテーマでもあるが、上記の日記と同じ場面がこの作品の中にも描かれている⁽¹³⁾。学校も家庭も子供の独自性を抹殺することに汲々としていたが⁽¹⁴⁾、カフカは成人後も母から子供のように世話を受けた。これは彼の独立性を奪い、幼児性のなかへ押しやる結果になったが、それを誰よりもカフカ自身がいちばんよく承知していた⁽¹⁵⁾。その結果、母に対して狂暴な感情を抱くこともあり、それはグレゴールが無意識に母を脅かすシーンとして描かれており、ここにも作品と伝記との間の一致がみられる。1912年11月におけるカフカの精神状態に照応する個所は『変身』の冒頭部分のグレゴールの内的モノログの中に読みとれる。外交販売につきまとう苦勞、それに朝の早い旅の苦勞が重なる。つまり列車連絡の心配や不規則な食事、不愉快な対人関係である。この時期、つまり1912年11月26日、フェリーツェに宛ててカフカは書いている。「家に全力を必要とする仕事をかかえているときは、決して旅へなど出て行くべきではないし、事務所での従順さなど拒否すべきなのだ。」⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾

全力を必要とする仕事とは無論文学であるが、カフカは文学活動と仕事の折り合いをうまくつけることができない。事務所での生活は地獄の生活にも較べられる。慢性的な睡眠不足、書類は紛失し、役人失格ではないかと考える自虐性もうかがえる。グレゴールは変身することによって商用の旅を逃れた。カフカ自身は「書く」ためにグレゴールと同じ脱出の道歩みたいと願う。事務所での仕事を拒否するこの感情はフェリーツェとの関係から裏づけられる。フェリーツェとの結婚の意志をかためたカフカはもしそれが不可能ならば退職して旅に出ようと決心する。大きなリスクを承

知のうえでベルリンでジャーナリストとなることも考慮された⁽¹⁹⁾。

カフカは『変身』のエピローグを批判的に語っているが⁽²⁰⁾、この場合も自伝的な要素を検討することで解釈できるように思う。最後の5頁ほどの描写はグレゴールが死んだためにグレゴールの視点では書かれていない。カフカは多くの場合、作品における語り手の視点を変えないが、『変身』ではその視点が変わっている。その点について、カフカは芸術的表現としての弱点を感じていたのだと説明する解釈がある⁽²¹⁾。だがその解釈は正しいだろうか。

実は1912年12月5日、つまり変身した主人公は死んでしまったが、エピローグはまだ書かれていなかった時点でカフカはすでにこの作品の表現上のいくつかの弱点に不満を示していた。それは疲労や出張旅行による仕事の中断など、つまりこの作品とは関係のない心労に帰せられるべきものであった⁽²²⁾。1913年9月～10月にはフェリーツェとの関係が完全に中断し、カフカは孤独に陥る。結婚と文学活動にたいして二者択一を示したカフカ自身は文学的能力において涸渇した状態にあった。そんな時『変身』を再読してその結末に不満を感じたのはこの問題の文学的解決のなかに自己の未来の可能性を結びつけて考えていたからではないのか。つまりカフカはグレゴール・ザムザのように自分自身が失われてしまう不安を感じたのではないのか。このような視点から眺めると『変身』は物語の始めも終わりもカフカの生活と固く結びついていたことがわかる。

父親の性格に関しては先に述べたが、例えばこの父親像をめぐる『死刑判決』、『変身』にはいくつかの類似点、構造上の一致が認められる。即ち若い時代の厳しい労働と順調な経過、そして裕福な生活。だがその後にしるのび寄る仕事上の不調と老齢などである。カフカの父ヘルマン・カフカについても同じことが言える。彼は南ボヘミアの寒村ヴォーセクの生れである。一家は屠殺業を営んでいた。ユダヤ教の宗教的慣習にしたがってそれなりの敬意は払われたであろうが、生活は当時としても貧しかった。『父への手紙』には7才にして手押し車をおして村々を歩いて回らなければならなかった、と書かれている。冬も裸足だったという。後にプラハへ

出てきて小間物屋を開業したが幼年時代からの努力の積み重ねが成功をもたらしたに違いない。息子を大学へ送り、娘たちを相応な相手と結婚させている。しかし裕福な生活もその後は沈静に向い、上の娘たち2人が結婚してからは下降線をたどっている。結婚による出費も大きかったらしい。経済的に自立しているのは息子フランツだけであった。妹夫婦らは経済的に父ヘルマン・カフカに依存するところが大きかった。⁽²³⁾ そのうえ父親は動脈硬化という病気をかかえており、家族に暗い影を投げかけていた。⁽²⁴⁾ それはザムザの父の健康状態を思わせる。またカフカの父は石綿工場も経営したが、これにカフカも出資参加していた。⁽²⁵⁾ しかし父の病状が進むにつれて破産のおそれも生れ積極的な参加を強く求められる。1914年12月、工場の仕事に不熱心であるという理由からカフカは父の叱責をうける。⁽²⁶⁾ 更に父の病状の悪化に伴い父の仕事を代行しなければならない、という可能性も出てくる。カフカが『死刑判決』を一夜の幻影、『変身』を恐ろしい夢とよんだ背景がここにある。

『変身』の話の展開を決定的にするグレゴールと妹の関係はカフカと妹オットラの関係を思わせる。長女エリは1911年、次女ヴァリは1913年に結婚したが、もともとこの2人はカフカとはあまり接触がなかったうえ、『変身』の成立の時期にはすでに結婚しているか、婚約しており、もはや家族の一員ではなかった。オットラは当時グレーテとほぼ同じ年令で一日中父の店を手伝っていた。彼女がフランス語を勉強していたことや両親の誤った親切やまた逆の冷淡さのなかで兄に近い関係にあったこと、あるいは食事の進まない兄に同情していたことなど、『変身』との共通項も多く認められる。彼女がまた両親と兄の仲介者の立場にあったことなども挙げられるだろう。

1912年10月、つまりこの物語の執筆がはじまる数週間前、両親はカフカに役所の終えた午後の子供の自由な時間を工場の仕事にふり向けるよう要求する。日頃は兄の味方をするオットラがこの時は両親に賛成すると同時に兄の生活態度を強く批判する。独立した生活の可能性を期待できなくなったカフカは自殺すら考える。これも物語との一致点である。⁽²⁷⁾

1915年1月、カフカは自分がいかに妹を精神的に抑圧してきたかを反省する。オットラがチューラウで自分の生活を始めるためプラハを去ったときは見捨てられた思いであった。⁽²⁸⁾ グレゴールが妹のために音楽院の費用を払おうとしたように1918年カフカはオットラのために農場経営を指導する農学校の費用を引き受けることをオットラに提案している。

カフカが妹に見捨てられたと感じていた頃、妹の名が記されている日記の個所にはフェリーツェの名が登場して読者の目をひく。ある時はフェリーツェが必要であると確信する、と書き、またある時は彼女がぼくを愛していようともぼくはそれに値しない、と書いている。⁽²⁸⁾ 『変身』の叙述のなかの兄妹関係にはオットラと並んで確かにフェリーツェの姿が重ね合わされている。それは後のミレーナ体験についても言えることであろう。

III オ ッ ト ラ

カフカの3人の妹と彼女らのたどった運命については簡単ではあるが要領よく述べられた H. ツィルベルクの文章がある。この3人のうち末の妹オットラがカフカのお気に入りであった。手紙の中で兄が繰返し書いているようにオットラは背が高く、大股に歩き、輝くばかりに健康であった。笑顔がカフカに似ていたという。兄に従い菜食主義をとり、教養はないが精神的なものにたいする愛は強く、兄による読書のすすめを兄の死後も守ったという。⁽³⁰⁾ ただ文学についての知識は殆んど無かった。彼女は他人にこまやかな心遣いを示すタイプの女性で貧しい者や乞食とも親しくした。彼女と共に時を過ごす人が満足してくれれば、そこに幸福を感じずような女性であった。例えば1916年7月、彼女は休暇をボヘミアの森で過ごしたが、父が休暇を延長するように言ってくれたにも拘らずこの申し出を受けずに帰ってくる。記録によると、両親と次女ヴェリはフラウツェンスバートへ保養に出掛けていたが、7月12日、父は一足先に戻っていた。つまりプラハに不在中の母が夫を一人きりにすることを喜ばないだろうとオットラは察したのである。後に彼女は両親と仲違いすることになるが、この時

も両親の満足を得られるように努めていた。こうしたやさしさは反面で些細な問題を大きな不安に変えてしまう弱さともなった。問題のこの性格は母から受け継いだものであろう。だが母から継いだ性格をオットラがそのまま完全に自己犠牲の形で示したわけではない。母方のレーヴィ家の反骨精神、正義感、感受性、不安感などがオットラの中で父の力と結びついていた。カフカがこの妹の中に父と母の結婚の最も純粋なあらわれを見ていたのは正しい。純粋、正直、誠実、筋の通った考え方、謙譲と矜持、感じ易さと節度、献身と自主、内気と勇気がバランスを保って融合していた。従ってオットラの人柄を父の性格の単なる「変形」と理解したヴェーゲンバッハには誤解があるのではなからうか。兄の世話をしたり、一時父の店の仕事をすべて引き受けて働いたオットラの強い一面だけが強調され過ぎているように思われる。⁽³¹⁾

カフカにたいしてはこの妹の性格はやさしい心遣いとなってあらわれる。彼女は兄の周囲の状況を兄の眼で見、兄の心で感じた。そして必要とあらば決然とその事態改善のために努力した。彼女は兄の身の回りの世話からパスポート、静養のための旅の手配、兄の欠勤の弁解や休暇願にいたるまで一人で走り回った。これら一切は彼女の助力なしには行われなかった。時折オットラはカフカの求める母親像そのものであった。⁽³²⁾

1916年12月以降、カフカは裏に広大な落葉樹の林のひろがるフラチーン城の横にあるアルヒミスト小路の家で規則的に執筆することになるが、これはもともとオットラが自分とイルマのために借りた家であった。しかしオットラはこの部屋を兄に提供する。冬でも兄が居るときはオットラはその時間を戸外で過ごして兄の執筆の邪魔にならないように気を配った。『屋根裏部屋で』、『狐師グラックス』、『田舎医師』、『支那の長城』、『観覧席にて』、『兄弟殺し』、『隣り村』、『トロッコ乗り』、『隣人』などはこの時代に書かれた作品である。ちなみに『トロッコ乗り』には当時の石炭不足の状況が描かれており、『隣人』は薄い壁 (elend dünne Wände) に悩まされる話である。この二つの短篇には新しい家の特殊性が反映されており、ここでも実生活が作品化されている。この時代、カフカは珍らしく充実し

た執筆生活を送った。それを彼は1917年5月15日妹に宛てた手紙のなかで感謝している。

オットラの文学についての知識は無きに等しかったということは先に述べた。それにも拘らず兄妹を親しく結びつけたものは文学であった。オットラは若い女性でもあり精神的に独立を欠いていたこと、結婚や仕事をめぐって家族の中の力関係に疲れていたことが兄のよびかけに応じて文学に接近する動機となった。また——遅くも1911年には——高い教養をもったチェコ人ヨーゼフ・ダヴィットと知り合ったが、これも勉学への意欲をたかめたようである。カフカは講演や芝居をすすめ、自作を読んで聞かせることもあった。更に進んでは文学作品や哲学のテキストと一緒に読み、話し合った。こうした関係は1916年以降殊に盛んで、この年の夏には——カフカがフェリーツェと度々会った7月を除いて——一緒にショーペンハウアーを読んでいる。この時オットラは自分がそれまで Schopenhauer の p を二つ重ねて書いていたことに気づいている⁽³³⁾。これは兄の説明なしには理解できないテキストであった。その後オットラは『ソクラテスの弁明』⁽³⁴⁾、プラトンの『饗宴』⁽³⁵⁾を読み始める。あるいはカフカが N. ストラヒョフのドストエフスキー入門書を朗読してきかせる⁽³⁶⁾。

この兄妹の文学鑑賞は1917年、18年のチューラウ滞在でも行われた。当時のカフカの手紙の内容から察して他にトルストイの『民話』⁽³⁷⁾、リリー・ブラウンの『ある社会主義者の回想』⁽³⁸⁾、シュティフターの『習作』の中の「二人の姉妹」⁽³⁹⁾などの作品も挙げられよう。

カフカの孤独癖はすでに早い時期にあらわれているが、それは年と共に強まっている。人前で自作の朗読をすることもなく、友人の朗読会に出席することもなくなっていたので、文学について語る相手はオットラだけであった。それだけにこの結びつきは強かったようである⁽⁴⁰⁾。そしてこの関係は単に文学鑑賞にとどまらない。やがてカフカは妹の人生問題全般にわたって相談にのることになる。殊に妹が1918年秋、農場経営についての専門教育を受けたいと望んだ時は積極的に支援した。かくしてオットラは1918年11月から翌年3月までフリートラントの農業学校の冬学期で二つのコー

スを同時に卒えることになる。

農業への道を選んだところからも察せられるように、オットラには自然にたいする鋭敏な神経があった、ブラハの旧市街に育ったカフカは日曜日には度々郊外へ出掛けている。彼にとって自然は精神的、肉体的に有用な存在であったが、それ以上の意味はもっていなかった。しかしオットラの場合は違っていた。自然は彼女の感情に語りかけた。自由な時間には夏も冬も、昼夜の別なく、旧市街のリングから数分のところにあるヒョテク公園へ出掛けた。オットラは月光に輝く公園の木立の美しさを興奮して兄に語りかける。カフカは次第に妹に影響されていった。当初オットラの眼で自然を眺めていたカフカもボヘミアの森での休暇やハイキングを通じて自然への理解を深める。夕陽を顔や胸に受けて自然を満喫する喜びを恋人フェリーツェに宛てて書くようになる⁽⁴¹⁾。こうした自然との接触は『突然の散歩』、『中庭の門を叩いて』などに反映している。

1916年7月中旬まではオットラもまだ父の店を手伝うことに満足していた。しかし自然への憧れは次第につのる。ボヘミアの森に休暇を過ごすうち、都会生活の煩わしさ、厭わしさが強まってくる。1916年11月11日、農場経営の可能性を父に相談する。1917年2月、オッターバハの農学校へ通う決心を固めるが、父の反対にあう。オットラの自然愛が農業という具体的な対象に結びついた背景にはカフカのものの考え方がある。都会集中型の西方ユダヤ人の生き方はともすれば寄生生活者というイメージを周囲に与え、孤立しがちであった。田園の中で肉体労働に従事することによってそんなイメージを払拭し、孤立から脱出したい。あるいは「生」を約束してくれる民族共同体の一員になれるかも知れない。カフカはオットラの農業にそんな可能性を見ていた。結局1917年4月中旬、オットラは義兄カール・ヘルマンの土地を管理するため——オッターバハの農学校ではなく——チューラウへ赴くことになる。(1918年11月から5ヶ月オットラがフリートラントの農業学校へ通ったことは前に述べたが、それはチューラウでの農作業の結果、より深い農業の知識の必要性を感じたからであった。)当時、戦争による諸々の関係の中で、殊に逼迫した経済生活から反ユダヤ

感情がたかまってくる中で、ユダヤ人の少女が生活を賭けてゲッターから脱出を計るということはそれだけで大きな事件であった。カフカはオットラの決心のなかに自分の願いをダブらせていたので、妹を助けて父に抵抗する。かくて兄妹の協力関係はますます強まってゆく。1917年8月カフカは初めて咯血を経験する。同年9月、8ヶ月の休暇を得てチューラウへ赴く。ここに1918年4月末まで滞在。更にその年の10月中旬、スペイン風邪にかかり、同時に胸の苦しみも訴えたので11月末、母とシェレーゼンへ行く。ここには1919年3月末まで滞在する。しかしカフカが静養先から両親に宛てて書く手紙は大抵は儀礼的な内容のもので、病状など大切な用件はオットラに宛てて書かれた。オットラはそれを必要に応じて両親に口頭で説明した。1919年3月6日の手紙はこんな妹の役割を明確に伝えてくれる。⁽⁴²⁾カフカとの文通から多くを知ることのできない母はときにオットラ宛にカフカの本当の生活状態を問い合わせたりすることもあった。息子の病気について母はまだ詳しくは聞かされていなかった。カフカの病状が進むにつれてオットラの中間者的立場はますます重要になっていった。

IV 『巢』(1923/24年作)

カフカがドーラ・ディアマンと過⁽⁴⁴⁾ごしたベルリン時代の短篇は『小さな女』及びここにとり上げた『巢』を除いて失われてしまった。それらはカフカの証言によれば、生涯憧れ求め、ついに得た父親からの独立、それが再び危険にさらされた内面の不安の妨御が作品化されたものであった。その原因は健康状態の悪化とインフレであった。これらはカフカを追いたてる魔神のイメージで何度も具体的に描かれている。ベルリンの住居は自然に恵まれていたが、肺結核にとっては決して良いとは言えなかったし、⁽⁴⁵⁾毎日の生活は破滅的な物価高に不安の濃い影に包まれていた。

『巢』はベルリンで書かれたが作品と深く関わる土地はチューラウである。農場経営のためオットラがチューラウへ移ったのは1917年4月中旬である。彼女は親しい人にも農場経営は順調であると手紙に書いた。しかし

実際に直面した困難は殆んど克服しがたいものであった。約20ヘクタールの土地、馬一頭、豚一匹、牛、鶏はいなかった。不幸にして1917年は旱魃で作物のできは悪かった。戦争による食糧不足からプラハはすでに飢餓状態にあった。翌年の穀物の種を入手するのさえ困難な有様であった。そのうえ農具の不足、人手はオットラの他に2人の女性がいるだけであった。オットラにとって自由になる時間は無かった。手紙を書く時間すらとれなかった。⁽⁴⁶⁾

その頃、つまり1917年9月4日、カフカは肺尖カタルと診断され一週間後、オットラのいるチューラウへ移る。この転地はカフカの外面、内面の生活の完全な変化を意味した。この村の季節の変化を通じて生活にリズムが生れ、殆んど病気を感じなかった。長時間の睡眠、ベッドの中の食事、寝椅子での日光浴、たそがれの中の散歩、夜は石油を節約するため、また「書く」気もおこらないのでオットラと一緒に部屋に過ごした。農作業を手伝うこともあったが、これはあまり役に立たなかった。⁽⁴⁷⁾

1912年から1917年までフェリーツェとの結婚をめぐる5年間の闘いでカフカは絶えず不眠、頭痛、発熱に苦しみ、更に精神的緊張などで肉体的に疲れていた。結核に侵され易い体調にあったと言える。1917年8月咯血。結婚の努力が結局水泡に帰したので、カフカにとってこの病気は決定的敗北を意味した。そんな時期に始ったチューラウの生活は理想の生活であった。⁽⁴⁸⁾ここで発見した新しい生活の芽生えがカフカのその後の友人、仕事、家族にたいする関係を規定している。意味のない自虐は影をひそめる。

1917年11月23日、オットラが災害保険を訪ねカフカの年金生活の許可を願い出るが認められなかった。表面は落着いてオットラのの通知を受け入れたカフカは翌年5月2日、再び仕事に戻った。体は順調に回復していたが役所の仕事に戻ることは極めて辛い生活になるだろうことは明らかであった。オットラとしては兄に戦争終結までチューラウに滞在していて貰いたいのだ、とダヴィット宛の手紙の中で訴えている。⁽⁴⁹⁾

当時オットラは両親の衰えることのない抵抗にあっていった。1918年初夏にはまだ母はオットラが何故にこんな辛い仕事をみずからに課したのか、

理解できなかった。父はその責任をカフカに帰した。父はこの兄妹が飢えと仕事を逃れようとしているのだと誤解した。この誤解は二つの点でカフカを苦しめた。その第一は都会に不足している食糧がチューラウでは容易に入手できるだろうと両親が勝手に考えたことである。実はオットラの農場では農場でありながら鶏や乳牛、穀物などが不足していたのである。⁽⁵⁰⁾ 第二の点はチューラウ滞在が永びくにつれてカフカが仕事を嫌っているのではないかと疑われたことにある。カフカの静養の真の目的は両親にまだ知らされていなかったからである。1917年11月22日、カフカの了解を得てオットラがはじめて父に静養の本当の理由を告げる。その際も、母が台所へたっていった短時間に話しをするなど、母への配慮がうかがわれる。彼女は父の心痛を察してチューラウには何の不足もないこと、兄に危険はないことなどを強調する。母は3週間後ようやく父を通じて病状を知らされる。⁽⁵¹⁾

罹病後のカフカはチューラウのほかメラーン、マトリアリ、プラナー、シェレーゼンなどを静養の地とし、時どきブラハへも戻ってくる。休暇と仕事への復帰、あるいは休暇の延長を繰返すが、役所との交渉にはすべてオットラがあたっていた。不眠、発熱、咳の発作、胃の痛み、痔の烈しい痛みにも悩まされる。1921年に入るといよいよ病状が悪化する。すでに前年7月結婚していたオットラは妊娠中であつたが出産直前まで休暇延長を交渉するためカフカの勤務先へ出掛けている。医者からの引退のすすめもありようやく1922年6月末、引退して年金生活に入ることを許可される。しかしその後も役所からの病状の調査や必要な書類の提出も義務づけられていた。家族に依存する生活とそれにたいする恐れ、逆説的であるがそれはまた精神的な結びつきともなっていくまでも続いた。カフカの勤務先であった災害保険局の存在もまた同じ作用をした。

この詩人の後期を支配する新たな生活形式は『変身』のストーリーの展開とはもはや重なり合うことはなかった。別な文学的形態を要求したのである。それは『渠』で着手された。

カフカの生前の証言の中では自分の静かな隠遁生活と、人間的な結びつ

きを破壊された状態は暗い地下道、墓穴、地下室などの生活と比較されている。他方そこに演じられる動物の生活形式は完全に人間的な要素から解放されている。カフカのプラナーからの手紙ではこの二つのイメージは互に結びついている。「走り回っているか、それとも絶望した動物が巣の中でするように石のように坐っています。いたるところに敵がいます。部屋の前には子供たちがいます。次の部屋の前も同じです。一瞬の静けさをつけて書いています。」⁽⁵³⁾ここに『巣』の表象世界が示されている。喧騒にたいする敵意すらもがあらわれている。同じ様にミレーナ宛の手紙ではメラーンの休暇のはじめを野獣のイメージでとらえている。その野獣は汚ない穴の闇の中に横たわっていたが、ついに自由な戸外にミレーナを見出して接近し、不安と幸せの交錯する中で力強く生きるのだが、この生活も永続きはしない。ミレーナとの苦渋に満ちた関係から再び暗い巣の中へ戻っていかなければならない、と認識する。ここにもカフカの生活の諸現象と作品との直接的な一致が認められる。また一方で静かな閉鎖的生活を送りながら、他方ではそれを中断してプラハへの旅を繰返さなければならなかったという二つの生活局面がこれに重なる。交互に繰返されるこの二つの生活状況が巣の内と外に生きる動物のイメージとして示されている。この動物が地下の生物によってさらされる絶え間のない脅し。これに類似するのがチューラウにおけるカフカのねずみに対する恐怖である。即ちチューラウの彼の部屋にたくさんのねずみが出てカフカは怖くて灯もつけられなかった、ということが起る。⁽⁵³⁾ここでもまたカフカ解釈は伝記的要素と文学的表現とを等価値において出発しなければならない。守りの不十分な入口からいつ侵入者が入ってくるかも知れないという恐怖は主人公であるこの動物にたいする世界の敵意を示している。手紙の中で自分の住居を「巣」とよんだことのあるカフカはそこへ他人、いや友人がきても *peinlich* で落着かない、⁽⁵⁴⁾と書いている。これが物語の中に反映している。

カフカにとってプラハのもつ様々な作用は、それが友人であれ、手紙であれ、精神の安定を乱すものとして生活上の敵と見做されていた。それはカフカがベルリンへ移った後も同様で、オットラを除いてプラハから客を

迎えることはなかつた。⁽⁶⁵⁾ 前述したようにカフカはみずから選んだ「地下の家」を規則的に去ってはプラハの現実を体験した。しかしそれは訪問者としての体験であり、現実の生活者の体験ではない。これを真の意味の現実体験とよび得るのか。静養を目的とする人間を脅かすこの種の危険について正しい概念をもち得ない。これがカフカを苦しめた。そしてやっと手に入れた理想の田園生活にも疑問を感じずようになる。

解釈にあたってこうしたいくつかの前提となる条件を考慮すれば物語の後半、殊に問題となる終りの部分も理解可能である。動物が地下の家に戻ってきたときに耳にする予期せざる騒音はカフカのチューラウでの体験と対比できる。つまり動物はその騒音を外から帰ってきた直後、家と食糧貯蔵庫を^{検分}して耳にするのだが、これと同じ場面をカフカは手紙の中に記している。「……周囲の家の予期せざる騒音のため家畜の数を^{検分}する作業が妨げられる……」日頃は寡黙な田舎の人たちが意外に騒々しい存在であることを発見したカフカが戸惑っている様子がうかがえる。この物語の中の騒音は従って、不愉快な世間のイメージと理解することができ⁽⁶⁷⁾る。

チューラウへ移ってからのカフカは友人との交際や文通も極力避けて孤独を求める。1917年9月21日、フェリーツェがチューラウを訪れる。これすらカフカにとっては苦しみであり、妨げであった。物語の中で問題となる「敵」はカフカの孤独を邪魔する一切のものと考えることができる。更にH・ビンダーは大きな動物から発せられるシッ、シッという音は戦中、戦後の生活不安、つまり進行しつつあるインフレへの不安であると推論している。⁽⁶⁸⁾ このインフレはベルリンでの生活を不可能にするかも知れぬ。再びプラハへ戻って家族や友人に内的、外的に依存して生きてゆかなければならないのか。この不安は大きかった。

この物語は断片に終わっているが、終りの部分の構想は見知らぬ動物による Vernichtung ではなく、恐怖の増大にたえかねての巣の退去ではなかつたろうか。『田舎医師』がしたように故郷を失って見知らぬ道をめぐり歩くことになるのではなかつたか。

カフカはチューラウでは Ringplatz のすぐ近くに住んでいたが、ここには広々とした野が広がっており、内面的に自由な空気を呼吸することができた。その後、彼が住んだ場所はよくここと比較された。ベルリンの住居も静かな環境の中にあった。自然の中の孤独を楽しんだ彼は体力が許せばよく散歩に出た。

「……それから私は世間を去り、まだ力が残っていれば静かな秋の並木の中へまぎれ込みます。私の歩く通りは町の雰囲気を残す最後の通りで、その先はすべてで庭園や別荘の平和の中に消えてゆく。どの道も平和な散歩道です。」⁽⁵⁹⁾ こうした例にみられるカフカの生活圏は『巢』の中にも反映している。動物は自分の城に満足している。ある時は眠気を感じずるほどであるが、またあるときは外敵の大きな不安におびえている。孤独にただ自分の巣だけを信頼して生きている。J・シレマイトが指摘するように、カフカの初期の文学においては失われた故郷は振り返れば手の届く近くに存在したが、後期の文学では明らかにそれが遠くへ離れていってしまったことを示している。つまり『城』や『巢』は方法こそ異なっているが新たな家を獲得するための闘いであった。『城』の主人公Kは、「もはや他所へ移って行く意志はない。ここにとどまります」と述べ、新たな家を獲得する意志のあることを明言する。⁽⁶⁰⁾

それはしかし闘いとよべるような華々しいものではない。H・ペンツィガーは動物学者K・ローレンツの学説に拠ってカフカの主人公たちの行動について触れている。即ち、狼や犬はライヴェルとの闘いにおいて必要とあらば闘いを終えるために敵に自分の急所を示すことがあるという。こんなとき攻撃側は種の保存の本能に従ってそれ以上の攻撃ができなくなるといふ。ペンツィガーは『巢』に限らずカフカの作品に登場する人物や動物にはこの Demutsstellung とよばれる行動がみられるといい、「謙譲 (Demut) は誰にでも、それが孤独に絶望している者にも、同胞にたいする最も強力な関係を与える」といふカフカの初期のアフオリズムを引用している。⁽⁶¹⁾

カフカの作品における動物の果す機能についてはK・H・フィンガー

トの詳論があるのでここでは触れないが、ただカフカには自分と動物を重ね合わせている例が度々みられ、例えばミレーナ宛の手紙の中ではみずからを「もぐら」とよんでいる。⁽⁶²⁾『巢』に描かれている動物については大きな猛獣（バイスナー）、モルモットかあなぐま（ゾーケル、ビンダー、パースレイ、マルクス）、あるいはもぐらかハムスター（ポリツァー）など諸説あるが、この動物を著者自身のポートレートであると解釈する点では一致している。

晩年のカフカにとって人生の目標はブラハから内面的に独立することであった。この作品を書いた時代、カフカはドーラと共にベルリンでひたすら静かな生活を求めながら病氣と闘っていたが、このドーラとの結びつきのなかにもブラハからの内面的独立が象徴されている。

註

- (1) 「芸文研究」36号(1977) カフカと >Hyperion< 誌 註(2), (4), (5)
- (2) 日記 1913年2月11日
- (3) H. 218 z 14 f, 164, 182, 189; F 219; 日記 1911年10月24日
- (4) F. 85; O. 50 及び日記 1917年8月8日
- (5) F. 99
- (6) F. 112
- (7) Br. 85
- (8) T. 190 f, 217
- (9) Dora Diamant あるいは Dyamant という書き方があるが、カフカは書簡集の中で Diamant と書いている。(S. 476, 477)
- (10) F. 101
- (11) E. 122
- (12) F. 64, 123
- (13) E. 93 ff
- (14) H. 202
- (15) T. 170
- (16) E. 72; F. 67 f
- (17) F. 130
- (18) F. 67 f, 102, 105, 122, 153, 346, 358, 413
- (19) F. 130, 530, 535, 551, 554; T. 372; E. 73
- (20) 日記 1914年1月19日

- (21) Friedrich Beißner, Der Erzähler Franz Kafka Stuttgart 1952 S. 36
- (22) F. 160; T. 361
- (23) カフカは1907年10月「一般保険会社」へ就職、翌年「労働者災害保険局」へ移った。F. 453 f.
- (24) F. 219
- (25) F. 68
- (26) 破産の危機 (1914年10月中旬), 父の叱責 (1914年12月19日)
- (27) E. 134 ff; Br. 107 ff
- (28) T. 454 f; O. 34
- (29) T. 404, 454 f
- (30) Wort und Tat 2 1946 S. 137; F. 91, 260 f
- (31) T. 515 (=F. 730)
- (32) F. 745; Br. 324, 389; M. 143, 153, 187, 240 オットラはカフカの求める母親像。T. 515; Süddeutsche Zeitung に載った “Briefe an Ottla und die Familie” の紹介記事では Ottla, wie eine Mutter von der Ferne という日記の中の文章がタイトルに使われた。(14. November 1974)
- (33) Hartmut Binder, Kafka und seine Schwester Ottla Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft 12 Jg. 1968 S. 432 参照
- (34) 8月14日～9月8日までで少しづつ読まれた。
- (35) 1916年8月13日
- (36) F. 692, 701
- (37) F. 722
- (38) F. 638, 695; Br. 282
- (39) Br. 420
- (40) T. 264, 501; F. 744
- (41) F. 677, 693, 701, 703 及び Binder の前掲論文 S. 437 参照
- (42) Klaus Wagenbach, Franz Kafka in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten Reinbeck 1961 S. 113
- (43) O. 72
- (44) ドーラは1923年7月カフカを知った。9月末, 同棲生活が始まる。晩年のカフカは友人との付き合いもほとんどない孤独な生活を送ったが, このドーラとオットラだけはカフカの一部として価値づけられている。(1922年の日記参照)
- (45) O. 150, 151
- (46) O. 34; Br. 175
- (47) Binder 前掲論文 S. 443 註 87; Br. 177, 181, 186, 233; T. 537
- (48) Br. 174, 182
- (45)

- (49) F. 753; Binder 前掲論文 S. 445 註 91
- (50) Br. 165, 175
- (51) Binder 前掲論文 S. 447 註 94
- (52) Br. 390
- (53) Binder 前掲論文 S. 449 註 96
- (54) F. 408
- (55) O. 137
- (56) Br. 193
- (57) Br. 198
- (58) Binder 前掲論文 S. 451
- (59) B. 453
- (60) Jost Schillemeit, Welt im Werk Franz Kafkas DVjs. 38 (1964) S. 181
- (61) Hans Bänziger, Das namenlose Tier und sein Territorium zu Kafkas Dichtung Der Bau DVjs. 53 (1979) S. 307
- (62) M. 164 f

使用テキスト及びその省略記号は次の通りである。

F. Kafka, Briefe, New York/(Frankfurt/M. 1958)=Br

Briefe an Felice (New York/Frankfurt/M 1960)=F

Briefe an Milena, New York/(Frankfurt/M 1960)=M

Brief an den Vater, in: Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande
New York/(Frankfurt/M 1953)=H

Tagebücher 1910-1923, New York/(Frankfurt/M. 1954)=T

Briefe Kafkas an seine Schwester Ottla, S. Fischer 1974=O

なお日記は T. としてその頁数を次に示したが、必要と思われる個所については日付で示した。